

縄文時代の“不思議な石器”

縄文時代の石で作った道具（石器）には、^{せきぞく}石鏃・^{せきそう}石槍・^{いしざら}石皿・^{すりいし}磨石・^{ませいせきふ}磨製石斧などのように、その形状や大きさから使い方が容易に判断できる「実用の石器」のほかに、^{せきぼう}石棒・^{せっけん}石剣・^{せきとう}石刀・^{どっこいし}独鈷石・^{せっかん}石冠といったその形状から名前がついているものの、使い方がよくわからない「不思議な石器」があります。

この使い方のわからない「不思議な石器」は、「実用的な石器」と同等、ないしはそれ以上に丁寧に磨いているなど、製作には^{てまひま}手間暇がかけられています。また、数も少なく地域性が認められること、最終的には^{はさい}焼かれて破砕されたものが多いことから、これらはその文化の部外者にはけっして正確に知ることのできない意味が込められたもので、^{じゅじゅつ}呪術や^{ぎれい}儀礼・^{さいし}祭祀の場で効果が発揮された道具と考えられています。このような「不思議な石器」は、縄文時代の古い段階から存在しますが、縄文時代の後半、特に後期後半から晩期（約 3,500～2,500 年前）の遺跡から多く出土してします。

おおがたせきぼう

大形石棒

石棒は男性のシンボルを連想させることから、^{しそん}子孫の^{はんえい}繁栄や^{ほうじょう}豊饒(豊かな実り)を^{きがん}祈願する祭祀に係わる道具と考えられています。直径 10 cm、長さ 1 m前後の大形石棒は、東北地方北部で前期後半（約 5,200 年前）には出現しますが、関東地方では中期後半から後期前半（約 4,500～3,500 年前）に多く見られます。

発掘調査で集落跡から出土する大形石棒は、ほとんどが火を受けて^{はそん}破損していますが、完存の大形石棒は、河川や河川を臨む段丘の縁辺などから単独で出土している例が少なくありません。このことから、当初豊饒を祈るための記念物として作られた大形石棒は、集落から少し離れた河川を臨む段丘縁辺に設置され、一定期間を経て役目が終わると、集落に持ち帰って火を介した^{はさい}破碎行為を伴う儀礼が行われ、最終的に住居跡や土坑に棄てられたと考えられます。

なお、「白色の石棒」は群馬県西部の安山岩、「緑色の石棒」は埼玉県北部から群馬県南部の緑色片岩で作られています。



完存の大形石棒 (155 cm)

羽場遺跡 (那須烏山市)
『考古学がよくわかる事典』より



御城田遺跡 (宇都宮市)

竪穴住居跡から出土した焼けただれた石棒と注口土器

せっけん せきとう
石剣・石刀

縄文時代後期から晩期に多くに見られる石器です。身の両側に刃をつくりだす石剣は、関東地方の後期末から晩期(約 3,200～2,500 年前)を中心に、身の片側のみに刃をつくりだす石刀は、晩期前半(約 3,000～2,400 年前)の近畿から北陸地方と、晩期後半(約 2,400～2,700 年前)の東北地方から北海道南部に多く分布します。

石剣や石刀は、中期の大形石棒が後期になり小形・扁平化する傾向が見られることから、大形石棒に由来する説と、刃がつくりだされていることから、中国大陸ですでにつくられていた青銅刀子や青銅剣などの金属器を模倣してつくったとする説があります。いずれの説も一長一短があり、両方が融合して出現したと考えられます。

栃木県では、石刀の出土は極めて少なく、埼玉県北部から群馬県南部の緑色片岩製の「緑の石剣」と、八溝～阿武隈山地の粘板岩や筑波山周辺の黒雲母片岩製の「黒色の石剣」が多く見られます。きれいに磨かれた石剣の頭部には、土偶にも見られる三叉文などのマジカルな文様が彫刻されているものもあります。

完形の石剣・石刀は、墓坑から被葬者の副葬品として出土することもあります。多くは

竪穴住居跡や配石・盛土遺構からの出土で、火を受けて破損しています。これらは土偶や独鈷石、イノシシやシカの焼けて砕かれた骨などと出土する例も少なくありません。廃屋の儀礼や地域や集落で執り行う先祖の霊を崇拝する祭祀の中で、権威の象徴である石剣・石刀が他の儀礼用具や動物と共に使われたものと考えられます。



御霊前遺跡（益子町）

竪穴住居跡から出土した焼けた獣骨・石剣・土偶（晩期）

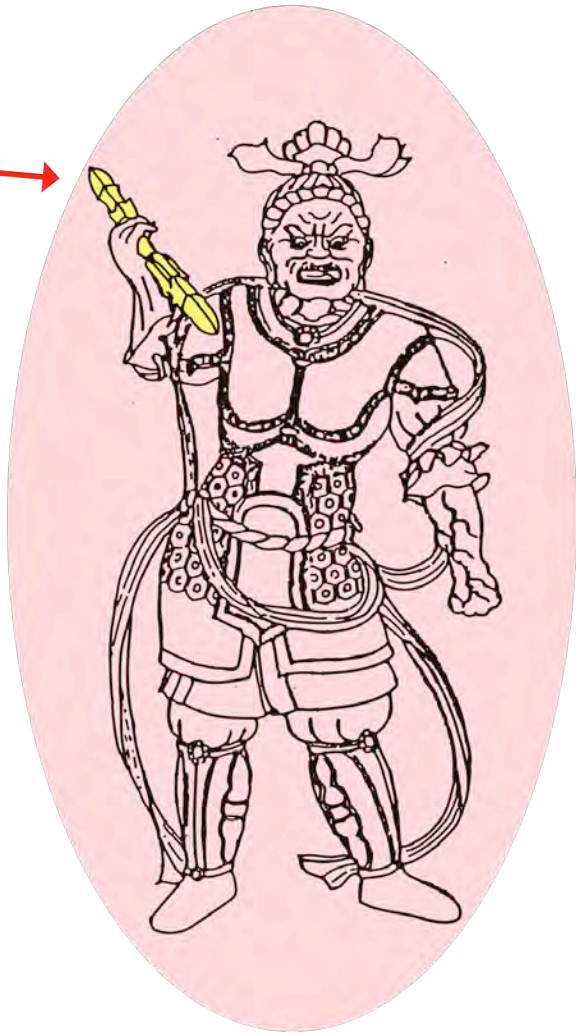
どっこいし 独鈷石

明治時代に密教法具の「^{どっこしよ}独鈷杵」に形状が似ていることから名付けられた石器です。両先端が斧や槌状^{つち}をしており、中央がへこみ、両側に突帯をもつものも少なくありません。縄文時代後期後半から晩期、さらには弥生時代前半まで残り、東日本を中心に全国各地で見つかっている石器です。

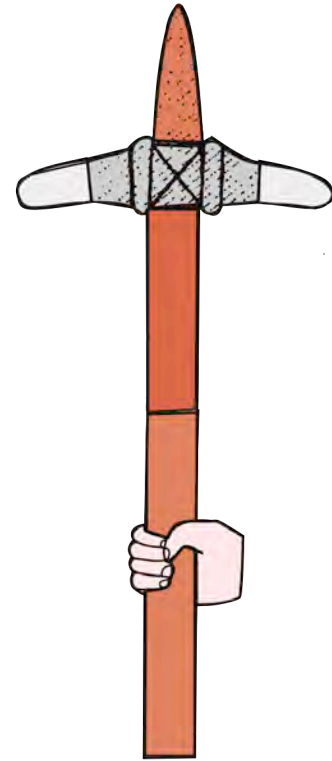
中央の突帯間^{どったい}に×状の刻線^{こくせん}や天然アスファルトが付着しているもの、突帯に切り込みを入れたものがあることから、柄^えに^{ちやくそう}着装し使用したと考えられます。石剣や土偶^{どぐう}などと出土している例も少なくなく、火を受け、折れたり先端が刃こぼれしているものがあることから、祭儀の過程で何かを^{たた}敲いたり破壊する行為があったこと、最終的には火で^{じょうか}浄化されたことなどが予想されます。



独鈷杵



独鈷杵をもつ仏像



独鈷石の着装想定図

渡辺誠 2003 「独鈷状石器の着装法」より

せっかん 石冠

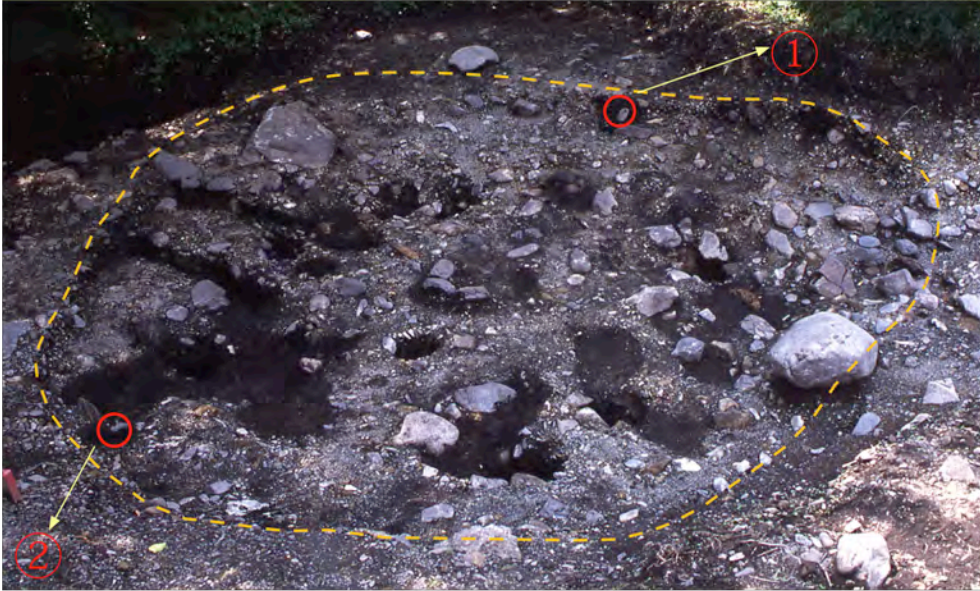
石冠も、明治時代に形状が冠かんむりに似ていることから名付けられた石器です。頭部は石棒のような半球形や石斧状のものなどいくつかのタイプがありますが、底部は窪みくぼを持つものや研磨けんまの著しいものが多いようです。縄文時代後期後半から晩期前半にかけて北陸・飛騨ひだ地方を中心に出土する石器で、晩期後半になると関東から東北地方に分布を広げます。頭部が半球形のものには、文様が施された土製のものもしばしばみられます。

火を受けているものが多く、赤色顔料せきしよくがんにょうや漆うるしの付着が認められるものもあります。凸部と凹部の形態から両性具有りょうせいぐゆうの性象徴せいしょうちょうの儀器で、「生産」や「繁殖」はんしよく・「増殖」ぞうしよくを祈願する祭祀で使用された道具とも考えられています。

豎穴住居跡から出土した石冠^{せっかん}

—川戸釜八幡遺跡（日光市）—

かたちが冠^{かんむり}に似ているのでこの名前がついています。用途については様々な説がありますが、「まつり」や「まじない」の道具と考えられています。



かたちの異なる石冠^{こと}が東西の壁ぎわから出土しました。

①の石冠には、ベンガラ（^{さび}鑄に近い成分の赤色顔料^{せきしよくがんりょう}）と黒漆^{うるし}で色が塗られています。